

2013年度 社会貢献フォーラム

2013年11月17日(日) 長崎県長崎市 長崎新聞文化ホール・アストピア

スポーツで育む地域と子ども

2013年度の社会貢献フォーラムは、「スポーツで育む地域と子ども」をテーマに、長崎県長崎市で開催された。おりしも長崎県では、2014年10月第69回国民体育大会「長崎がんばらんば国体」、同年11月に全国障害者スポーツ大会「長崎がんばらんば大会」が開催され、それに向けて、スポーツ気運が盛り上がりを見せている時期。

地域の活性化や子どもたちの成長にとって、スポーツはどんな役割を果たすことができるのか。今回のフォーラムでは、NHKプロ野球解説者として活躍する梨田昌孝さんによる講演会や5名のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。

主催:

全日本社会貢献団体機構/
長崎新聞社/
全国地方新聞社連合会

後援:

長崎県/長崎県教育委員会/
長崎市/長崎市教育委員会/
NHK長崎放送局/
共同通信社/
全日本遊技事業協同組合連合会/
長崎県遊技業協同組合

第一部 講演

「梨田流コミュニケーション術」/梨田昌孝さん

ちょっとしたひとや機転で
コミュニケーションはうまくいく



2008年、北海道日本ハムファイターズからお話をいただき、監督を引き受けることになったが、縁もゆかりもない球団や土地に行くことに、最初は不安やとまどいを感じた。しかし、北海道に行ってみて、その思いはすぐに払拭された。選手としてプレーし、監督も務めた近鉄パファローズでは、ファンのヤジがきつかったが、それに比べると北海道のファンは、勝っても負けても温かい拍手を

くれる。ファンに支えてもらっているのだから、なんとか勝って恩返しをしたいという気持ちが強くなった。そのおかげで、09年にはリーグ優勝を達成できた。

ファイターズの監督として学んだことは、ファンサービスをはじめとする地域密着の大切さ。球団全体で地域と接するために、さまざまなことに取り組んでいる。たとえば選手は病院へ慰問に行くが、これは入院している子どもたちはもちろん、付き添っているお父さん、お母さん、さらに医師や看護師さんも激励するため。また、小学校への訪問も欠かさない。

コミュニケーションがうまくいくための基本は、やはり自分のためではなく、チーム全体がうまくいくにはどうしたらよいかを考えること。その意味で記憶に残っているのは、稲葉篤紀選手と北川博敏選手。私が日本ハムの監督になったとき、「僕が今まで仕えた監督はすべて優勝しているので、梨田さんも絶対胴上げする」と、稲葉選

出席者プロフィール

梨田昌孝さん
NHKプロ野球・MLB解説者



島根県出身。1972年近鉄パファローズ入団。現役時代は強肩とコンチャク打法で活躍した捕手。88年現役引退後は、NHK野球解説者を経て大阪近鉄パファローズ、北海道日本ハムファイターズで監督を務め、リーグ優勝2回。現在はNHKのプロ野球・MLB解説、「サンデースポーツ」出演をはじめ、テレビやラジオで活躍中。

山本浩さん
法政大学スポーツ健康学部学部長



島根県出身。東京外国語大学卒業後、1976年NHK入局。アナウンサーとしてサッカー、アルペンスキーを始め、スポーツ全般に携わる。2000年からは解説委員として、サッカー、大相撲、プロ野球の抱える諸問題、アマチュアスポーツ、指導者論などに論陣を張ってきた。09年退職。13年から大学でスポーツメディア論などを講義。

松尾道彦さん
長崎県遊技業協同組合理事長



長崎県出身。(株)松茂代表取締役社長。長崎市遊技場組合組合長を兼任するほか、九州遊技業連合会、全日本遊技事業協同組合連合会、NPO法人長崎ロマン協会、長崎県暴力追放運動センターで理事に就任。交通安全推進県民協議会、職域防犯協会、長崎市消防団、ライオンズクラブなどで県・市・地区の役員を歴任。

城知哲さん
長崎新聞社運動部部長



長崎県出身。長崎北陽台高校時代はラグビー部に所属。青山学院大学卒業後、1991年長崎新聞社入社。長年、長崎県内のスポーツ、インターハイ、国体、各種全国大会の取材に携わり、総務部などを経て、2004年から運動部デスク。08年には北京五輪を取材。12年4月から現職。

手が言ってくれた。彼は個人の成績はどうしてもよく、常にチームのことを第一に考えている選手。北川選手は、若い選手だろうがライバルだろうが、いいプレーに対しては自分のことのように喜んで、「ナイスプレー」、「ナイスバッティング」と声をかける。

また、ちょっとした機転も、コミュニケーションを円滑にするためには欠かせない。解説者時代、ヤクルトの監督だった野村克也さんに挨拶に行ったら、「古田は俺ではなく、お前のことを捕手として尊敬しているらしい」と無然とおっしゃった。そこで私は、機転を利かせて、「古田の背番号の27は、野村監督の19と私の8を足したものの。2/3は、監督のほうを尊敬していますよ」と言ったら、その場が和やかになり、野村さんとの距離が近くなった。また、私が日本ハムの監督をしていたとき、楽天の監督を退くことになっていた野村さんを、日本ハムと楽天の



両球団の選手で胴上げした。それ以来、野村沙知代さんまで、私に挨拶してくれるようになった。

コミュニケーションがうまくいくかどうかは、ちょっとしたひとや機転、ものの考え方が大きく関係してくると思う。

第二部 パネルディスカッション

「スポーツで育む地域と子ども」

スポーツの世界のタイムリーな話題と
スポーツの持つ力を再確認した基調報告



第二部では、村松真貴子さんをコーディネーターに、梨田昌孝さん、法政大学スポーツ健康学部学部長・山本浩

さん、長崎県遊技業協同組合理事長・松尾道彦さん、長崎新聞社運動部部長・城知哲さんの5名によるパネルディスカッションが行われ、まず、山本浩さんが、「スポーツ世界を瞬間冷凍して見てみよう」というタイトルで基調報告を行った。

「いま、スポーツの世界では、コーディネーショントレーニングというものが盛んに行われている。これは刺激や情報を瞬時に分析し、行動に反映させるトレーニングで、脳神経系回路や運動器官の活性化に効果がある」とのこと。実際に梨田さんとアシスタントを被験者として、さまざまな条件を課しながら、お手玉をキャッチするという

村松真貴子さん
アナウンサー・エッセイスト



東京都出身。武蔵大学人文学部卒業。SBS静岡放送の「テレビタリ」でキャスターを務めた後、NHKの「イブニングネットワーク」「こんにちはいっとけん」「きょうの料理」などを担当。現在はNHK学園、NHK文化センターで講師を務めるほか、全国で講演、朗読活動にも取り組んでいる。全国公民館連合会理事。



スポーツで育む地域と子ども

トレーニングの一端が紹介された。最も高度なレベルは、振り向きざまに算数の計算をし、さらに指定された色のお手玉を指定された手でつかむというもので、極めて難しいものだった。これをスポーツの直後にやるとリラックス効果があり、脳梗塞の患者さんのリハビリテーションにも取り入れられているという。

さらに、スポーツの指導についての話があり、「スポーツは楽しくて、面白い。まずそれが中心にあって、その周囲に指導や教育があり、さらに達成感がある。スポーツの指導では、負の強化と正の強化について考えなくてはいいけない。前者は叱ることをベースにした指導で、これには管理されているという感情や強迫観念が残り、結果的に自発性が下がる。一方、褒めることをベースにしたのが後者で、これは喜ぶ環境を作ることがポイントとなる。褒めると自由意思が働き、満足感にもつながりやすい」という。

また、昭和7年に指導者向け教本として出版されたカール・ラングレン著の『ベースボール』という本を引き合いに、「プレーヤーにとって最も大切な基本原則は、和や



かな気分でプレーすることと書かれていて、そのために指導者は駆り立てたり叱り飛ばしたりせずに話して聞かせること、自分から進んで和やかな気持ちを持つように教えることが大切だと指摘している」と、指導者の心構えについて語った。

最後に、「生活スタイルが身につく」、「自分への敬意を高める」、「目標設定の方法を学べる」、「タイムマネジメントのスキルを磨ける」など、「アメリカで子どもにスポーツをさせる7つの理由」という調査データについて取り上げ、「スポーツの持つ力というものについて考えるとき、このような観点でスポーツを眺める時代に来ているのではないかと、話を結んだ。

長崎県下で継続的に行われているスポーツを通じた社会貢献活動の実例



続いて、長崎新聞社が行っているスポーツ関連の社会貢献活動について、城知哲さんから紹介があった。

「長崎新聞社が主催する少年ソフトボール選手権大会は、30年以上続いている大会で、毎年、約90チームが参加している。同じく郡市対抗県下一周駅伝は、60年以



上続いている大会で、小学生からシニアまでの参加選手が3日間で400キロ以上、たすきをつないで走る。どちらの大会も多くのボランティアに支えられているが、特に駅伝は地域の住民や企業など2000人以上が運営に協力してくれているし、その郡市の出身者で県外に住む人か

らの差し入れもある」という。長崎新聞では、その駅伝の様子を3日間にわたり、紙面の2～3ページを割いて報道しているという報告もあった。

松尾道彦理事長からは、長崎県遊技業協同組合が取り組んでいる社会貢献活動の事例が紹介された。

「私たちは、地域貢献なくして業界の発展なしを合言葉に、街づくり運動、青少年健全育成、スポーツ・文化活動、社会福祉の向上を援助する活動や団体への支援など、さまざまな社会貢献活動を行っている。たとえばスポーツ関連では、大村親善少年野球大会、わんぱく相撲五島場所などの支援がある。また、2014年のがんばらば国体とがんばらば大会への寄付も行った。福祉関係では、毎年、青年部主催でチャリティゴルフコンペを実施して児童養護施設へ寄付したり、県内の授産施設に作業を委託し、仕事の対価として報酬を支払うという形で支援を続けている。このほかにも傘下の各ホールが、献血、地域の清掃、イノシシ被害防止への支援などに取り組んでいる」。

また、山本さんの「スポーツを見たり、応援したりする際、選手やチームが自分と同じかどうか、自分と関わりがあるかどうか大きなポイントとなる。それが地域とのつながりを育むことになる」という発言に対し、城さんは、「諫早市出身の内村航平選手がオリンピックで金メダルを取ったことが子どもたちの勇気や希望の源になっている。長崎県出身のスポーツ選手の活躍が地域にとって一番の活力になる」と応じた。

最後に、「スポーツを通じた社会貢献としてすぐにもできることは？」という村松さんの問いかけに対し、各パネリストからは、「ひいきのチームに対しても、相手チームに対しても、きちんとしたマナーで応援することが社会貢献につながる」(城さん)、「自分でプレーするにしろ、応援するにしろ、もっとスポーツに関わることで、地域に社会貢献の輪を広げていくことができる」(松尾さん)、「子どもたちにスポーツの魅力をしっかりと伝えていくこと。ドイツでは、スポーツの魅力として、精神面や体調面への効果と並んで、世界や社会を知ることにつながるということが挙げられている。これはまさにスポーツを通

じた社会貢献ととらえることができる」(山本さん)、「子どもたちに勝ち負けではなく、スポーツすることの楽しさ、チームワークの楽しさといったものを教えてほしい。2014年の国体やがんばらば大会が、そのきっかけとなることを期待している」(梨田さん)といった発言があった。

パネルディスカッション終了後に、主催者を代表してAJOSCの吉原丈司理事が、参加者やパネリストに対する感謝の言葉を述べ、2013年度の社会貢献フォーラムは散会となった。

青少年健全育成と地域活性化にスポーツが果たす役割を再認識

長崎県遊技業協同組合理事長 松尾道彦さん

長崎県遊技業協同組合や各支部組合では、これまでスポーツ活動への支援を行って参りましたが、今回のフォーラムに出席された方々のお話を聞いて、スポーツが青少年健全育成と地域の活性化に大きな役割を果たしているということに再認識しました。また、今回、私たちが取り組んでいる社会貢献活動・社会還元活動の一端を発表させていただく機会を得ましたこと、さらにそれらの活動をご出席の皆様方から高く評価していただきましたことに感謝申し上げます。今後ともスポーツへの貢献活動に取り組んでまいりたいと考えております。

私どもが行っている社会貢献活動が、広く社会一般に認知される機会は多くありませんが、私たちは「地域への社会貢献なくして娯楽産業の発展はない」との思いで日々、取り組んでいます。近年、遊技人口の減少などによる業績悪化に見舞われ、社会貢献活動の浄財確保もままならない状況ですが、社会貢献活動は私たちの業界に課せられた重要な責務であるとの認識を今回のフォーラムで新たにしました。今後とも、県遊協傘下の組合員が一体となつてがんばる所存です。